

---

# 咎人の翼～序章～

Cadenza

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咎人の翼／序章

### 【Zコード】

N3399C

### 【作者名】

Cadenza

### 【あらすじ】

高校生にして世界の頂点に立つ翔凪貴吾の物語

## 一人の俺

俺は教室の片隅で国語の授業を聞いていた。

特に変わったこともない高校二年生

はつきり言って普通他人と違うのは身体と性格、能力位なものであります普遍すぎる生活

をしている。

別に不満な訳じゃない。

特に疲れている訳でもない。

後十分弱で授業も終わる。

そうすれば休み時間だ。

一般的に言って休み時間で言つものは十分程、寝るには短いとしても後五分・・・早く終わりやがれ早く終わりやがれだるい事この上ない。

三分・・・

二分・・・

一分・・・

よし！終わった。

うちの学校にはチャイムと言う物がない故に授業がよく長引く

『早く終わりやがれ』つい口に出てしまつ

あ〜休み時間

あつと言う間に終了

使えん使えなすぎる

『ナメトンノカイ』

一限は

Oral communication 1とか言つ英語なのだが・・・

教師がうざい何故か授業マイクを使う。

余程マイクの感度が良いのか鼻息がかかつただけで反応する「声出

せ～」面白いように声

は出ない。集団b o y c o t t だらつか？

なんか言つてますがみんな無視・・・露骨に無視「ははは」もう笑うしかない

詰まらんし自己紹介がまだだつたな

俺は貴吾  
しょうなきみ

翔凪貴吾

まあ・・・氣にすんな

身長は166cm

体重57kg

性格は二重人格いや本物の。つうわけで性格は二つある

今は主人格なんだがあんまし出たくないだるい

口癖は「だるい」だと思う。

別人格についてはまあ追々語ることにしよう。

なんかいつの間にか授業が進んでんだが気にしないはつきり言つて関係ないね。

日本人なら日本語使え！！

なんだが長引きそうだ。

あんまし楽しいものじゃない

はあ休み時間

「次の授業はなんじやらぽん」

正直科学技術理論良く分からん

気がついたら授業終わつてるしまあ関係ないか？

いいか、次は四限、終われば昼休みなのだ。

この学校は購買部がない故にパン販売が来る。パン販売には裏メニューがある。

普段弁当無しが予約するのだが裏メニューは予約できない如何にに速く一階に着くかが裏メニューを手に入れる必要十分条件である。

最近俺はアグレッシブインラインスケートをやつている。

要するに鉄柵を滑走するやつだ。

その応用編で階段の手すりを滑り降りるまさに滑降つうやつだ。

普通下るのに一分この方法なら三十秒4分の1に圧縮できる。

気合いだ！！

そんなにまでして手に入れるパンはそんなに美味しいのか?と言われる

る? そうでもない実際、需要と供給があつてない。

そのため買い占めに走る奴がいる。

だから走るのだ

だがまだ四限、余裕だ。

また気がついたら授業終わってるし・・・。

昼休み

自席で苦労して手に入れた飯を食つていてるといつもメンツが集まつてくる。

右から二島菜実身長が147cmしかない。たまに見えないでぶつかる。

そのとなり影が薄いのは・・・はて?誰だっけ?

青柳秀司だつたつけ?もう良く分かんないから次。

宮良隆士いざと黙つとき頼りになる。

電気系に強くAudioVisualが専門。

その奥にいるのが坂牧和也いわゆる天然記ピー。

兎に角工口い。

Arcade GameのDrumotakuでスキルポイント1000を超える強者。

その横にいるのが

仲里要軍事マニア特に第一次世界大戦が好きらしい。

坪口弘行大食漢。

兎に角年中食いまくる。

その前で暴れてるのが蟻真ありま大佐と鏑木たいさW e c k 1

『かぶらぎウニツ「一』鏑木の方はロシアと日本のクウォーターだとか（汗）本当か？まあ一人はセットで覚えとけそんなもんか。

「なあ今日どうする？」面良が聞いてくる。

毎週月曜日は金糸町のゲーセンに行くのが恒例になつていて

「どうしようかな」今日は金がない。

作るか？

「行くかも」と答えておく。

ちなみに作るのは

偽札という訳じやない。が、『化学系理分再術』と言ひやつを使う。はつきり言って一般には鍊金術と呼ばれている。

この学校は『理分再術』を扱えるようになるための学校なのだ。とは言つても普通の学校と違うのは科学の授業多いし理分再術の授業があるということだけだが。『理分再術』とは

理解分解再構築術

の略称であり現在最高ランクの科学であり難易度も半端じやない。それ故、悪魔の研究とか言われてたりする。

危険も多いし偏差値も相当高い連中が集まつていて。

元々この学校は国立で偏差値が高い

上一般には入れない

俺の周りの連中も例外では無く偏差値70超えがゴロゴロいる。まあ俺は例外で60程しかな

いがそれは実技推薦で入ったからだ実技推薦は100人に1人入れるか入れないかとか言うレベルらしい良く解らん。

学校の設備はどつかの大学並みの馬鹿げた研究施設がある。理分再術は誰でも出来る訳じやない。

魔鏡、

魔劍、  
魔槍、

身体の特徴として魔眼をもつ者のみがこれを行使出来る。

まあどうでも良い話だが俺は魔眼と魔銃剣と呼ばれている特殊な道具を使つていて。通常、剣、槍などの力を使つて陣を書いたり、銃に魔弾を装填しその力で変化を起こす。

だが魔眼持ちは違う。眼や手だけでこれを行使出来る。まさに化け物だな。俺は眼じゃ出来ないが手を合わせて考えた通りに出来る。それぞれ宝具と言われてたりする道具を持ち歩いてるんで学校内はかなり変な光景が広がる。

刀をぶら下げる奴もいれば槍を背負つてる馬鹿もいる。

俺は持つてこいと言われない限り持ち歩かない重いしだい。チョイと紙から諭吉さんを創つてゲーセンに行く。

わはは見たか現代科学の力。

「オセー ヨ貴吾」

坂牧が言つ。

「ウルセー 全力で黙れ」 答える。

「で？ 誰が最後だ？」

聞いて見るが「未だ俺だよ」と森谷答える。

もりたにまさと森谷正人はクラスが違うが一年の頃一緒だった。

「分かつた順番とつとけ」

両替をしていない。何ら問題なく両替機に吸い込まれていく百円玉

×10と漱石さん九人が出てくる。

投影（複製を作り出す技術）は成功したようだ。

両替をすませて戻つてくる。

なんか森谷はあつさりゲームオーバーになつていてる。

「俺の番かよ」 ちょっとビックリ・・・森谷はかなりうまいんだがまあ調子が悪かつたんだろう。

無難にこなして次に廻す。なんかだるいな、まあ気にしない関係ないし。

大人数で回していくため全部で五回しか出来なかつた。

「もう七時か

坂牧が自慢のＷｅｂを取り出して言つた。さすがにもう帰るか親ウルセーし。

まあ今から帰つても八時位だが。

家に着くとすでに飯は出来ていた。

上着とＹシャツを脱いで椅子に放る。手を洗つて飯を平らげ部屋に行つてパソコンでネットをする。

毎日同じ流れだこれを変えると朝起きられない。

ネットで自分のページを更新して宣戻のページを覗く何もないうつので退避。

「寝るか」何もすることがないので寝る事にする。ちなみに風呂は入らず朝入つて行く。

眠りにつく直前。ケータイが鳴りやがつた。

「はいどちらさんですか？」不機嫌に聞くと、「何を怒つている？新宿で理分再術師が暴れ回つている。なんとかしろ。」「

「タダメーデンワニデルコトガデキマセンピーツトイウハッシュンオノアトーメツ・・・・・・・・・・・・

「ぐだらんこと言つとらんではよこいちなみに香奈恵ちゃんには先に行つてもらつたから悪しからず。」

「はあ？までジジイ香奈恵を引っ張りだしたのか？死ね馬鹿被害者増やしてどーすんだ？このタマナシ不能野郎！」「

「ブーッブーッブー」

切れてるし。

はあだるいが行くしかないか。

「・・・・・・・・新宿か」

香奈恵と言うのは、フルネーム長田香奈恵俺の小学校からの友達で攻性理分再術師をやつてゐる。

俺は面倒くさがってそう簡単に出ていかないから香奈恵が出しに使われるようになった。

今電話してきたのは内閣府の草薙と言つ男で性格がめちゃ悪い。兎に角着替えて新宿に向かう。向かうと言つても電車や車ではなく空を飛んでいく。

高速で構築式を展開『WING』の理分再術を発動新宿までおよそ五分それまで持つかどうか解らんまあ良いか関係ないしとは今回ばかりはいえない他の馬鹿は死んでも構わないが香奈恵だけは死なせるわけにはいかない。

始まつてからもう何時間も経つてゐるかと思うくらい一分一秒が長い恐ろしく長い理分再術師との戦いは何度も経験したがこんな奴は初めてだ。

一気に三体の龍クラスのキメラを作り出してなお攻撃の手をゆるめない。

油断した。右足をやられた。しかし相手も相当キてゐる。そこに勝機がある。

敵は三体の”龍”をさらに一つに合成しようとしている。好機これを逃したら次はない。

全力で踏み込む!! 刹那上から龍の尾が降つてくる……やばい……

「・・・ローアイアス」

新宿に着いて当たりを探す。  
見えた。

彼処か!!

音速を超えてなおスピードを上げる……  
あの爆発は尋常じやない。

いた！！

「こきなりピンチかよ」

さう。「スピードを上げ突っ込む！！

「・・・ローアイアス」無敵の盾の投影を即座に展開する！！龍の尾を受け止める。

渾身の力で跳ね返す「大丈夫か？お姫様怪我ないか？」

「・・・余計なお世話よ」

「痴話喧嘩は後だまでは彼奴を消しとばす！！」

突っ込む先刻のスピードを遙かに凌駕し右手に握られた剣を渾身の力で降り抜く龍は音を立てて両断される。

一休目

「貴吾！..後ろ！..」

「だい じょう ぶ！！」

回転しながら構築式を展開濃硫酸を射出龍の足を止めてさらに同時に構築式を展開電熱を刀

身に注ぎ込み堅い鋼のよつな鱗を一気に溶かし斬る。

二休目

さらに構築式を追加展開電熱を利用し水を水蒸気に変える！！辺りに霧が出来それに身を隠す。

さらに力技で酸素と水素を合成同時に避雷針を龍に向け射出、電気が発生、水蒸気を伝い龍に直撃。

三休目

「ふう終わったかな？」さつき見えたのは三休これで終わりなはずだな。

「もう終わりか？」後ろを向き香奈恵に聞くと

「後ろ！！」香奈恵に突き飛ばされるが踏ん張つて退かない。龍の一撃をまともに食らつた

のは初めてだな・・・そこで意識が遠退いていく。

薄れていく意識の中で

「後は任せろ貴吾」

たしかにだが不明瞭な声を聞いた。

急激に背中が熱くなつてくる。手に持つた剣は強く輝き、魔眼は蒼から金へと変わり辺り

の空間を威圧していく明らかに先刻の男とは違う怪物がその位置に立つていた。

「座つてろ」男は一言だけいって振り向いた。

それからどれくらい経つたのだろう気がつくと俺は龍の死体と術者の男の頭の上に座つて

いた。「またやつちまつたか。」呟く手の下にあつた頭を投げ飛ばして立ち上がつた。なんか周りの人たちが何か怯えているんですけど（汗）

とりあえず俺が（別人格）壊したと思われる建物を修復。

「ねえ今のつて貴吾？」香奈恵がビクつきながら聞いてくる面白かつたので

「何だテメー」と言つてみると

何か泣きそうなんすけど・・・・・・

・・・・・・分かつた俺が悪かつた」素直に謝つてまづ足にあつた傷を治してやる

「あ～泣いちゃつた？

「「めん。」めんなさい。ちょっとした冗談だつたんだよなあ頼む

から機嫌直してくれつ

て」「必死で弁解。しかしこの女、俺の予想を遙かに超えた策士だつた「じゃあなんでも言つ事聞いてくれる?」

は〜つ? 聞いてくれる? 今後に及んで? 無難に「出来る範囲で頼む。」と言つてみる。

「じゃあさつきの何?」

さつきの?

「さつきのと言いますと龍にブツた斬られた後?」

頷く香奈恵。

「あれは俺じゃ ない。剣鏡つるぎきょうつて言つ別人格な訳だから何をやつてどうし

たのか解らないそれにあいつが強いのは今に始まつた事じゃないし。」

嘘だろつて言つ田でこつちを見んな

「嘘はこれっぽっちも無い。」

「本当 なの」

香奈恵が聞いてくる「じゃあどうしたら良いわけ?」

「だつて剩りにヤバ過ぎだつたもんあんなの鬼か悪魔だよ?」

「あいつは・・・そんなもんじゃない! !」

怒鳴つた。

そうあいつは悪魔でも鬼でも無い。

そんなもんじゃない「人間だよ。あいつは普通の人間以外の何者でもない! !」

なんで人は強い奴とか異型の奴を化け物呼ばわりすんだ。絶対におかしい。同じ人間なのに・・・・・・きつと人は自分と違うものを神だ悪魔だと言つてきたのかも知れない。

『あんなの鬼か悪魔だよ』 か。いつも助けたのに鬼だ悪魔だと罵られ唯の一度も人間として呼ばれたことはなくいつも一人の人間の影としてその身を置いてきた。魔眼と呼ばれる眼を持ち、伝説の剣の片割れを手に多くの人を切り時に英雄と呼ばれたこともあつた。

今まで俺を人と呼んでくれたのは一人でも今回の器は俺を人と呼んでくれた。

だからコイツの為に俺が出来ること、コイツが傷つき倒れたときコイツが還るべき身体を守ることとコイツの守るべきモノ總てを守ること。

俺に出来ることはそんなもんだ。

二人の俺が持つ剣は伝説の剣の剣銘はエクスカリバー。余りに有名なこの剣の所持者の影として俺は存在している。いやこの剣は俺であり俺はこの剣だった。

コイツは俺にとつて五人目の器だった。今まで四人が四人回りぐどい説明をしてきたがコイツは『お前はそういう存在なんだろ?』で片づけてた。

もう一人最初の俺の所持者は女の子だった。その少女には剩りに重すぎる王の役目を背負っていた。それまで俺は存在していなかつた。確かあれは彼女との最後の戦いだったと思う。

町の人間に反旗を翻したとき結局仲間に裏切られて深い眠りにいったその時『俺』は刀身と柄の二つに分けられ湖に封印された。しかしながら昔は伝説の名剣とまで呼ばれた『俺』にも今は人としての名がある。

## 剣 鏡

今の器（相棒）が付けてくれたものだ。理由は『俺はこの剣自体だ』と言つた事で『この剣は鏡みたいだから』だそうだ。安易な名前だ

が嬉しかつた。

俺は剣であり人では無い。

なのにコイツは名前をくれた人から貰つた一つ目のモノだつた。いつの間にやら俺はコイツの思い通りに成つていたのかも知れない。

あれからどうやつて帰つてきたのか分からぬ。信じられないが新宿から帰つて来るまでの間の記憶がない。そうだ香奈恵は大丈夫だろうか？電話してみるか。

まぐらもとのケータイをとり電話をかけてみる。

「どうしたの？アンタから電話なんて珍しいね？」

「昨日の今日だから大丈夫かな？と思つてな」

なんかコイツ嬉しそうだな？しかし意外な返答が返つてきた。

「何が？」

何もかにもない。

「体に決まつてんだろ！－女の子なんだからもう少し体を大事にしろよ」

「心配してくれてんの？ありがとうでも傷はアンタが治してくれたしどこも痛いところとかないそれにアンタ心配してくれたから苦しいどころか嬉しいよ！－」

そうかそれで。

「そいつはよかつたでも女の子なんだから危険なことはやめてくれ俺たちの体が保たん。」

「俺たち？」不思議そうに聞いてくる。

「俺と鏡だよ」簡素に答える。

「鏡君？貴吾の別人格の？何で？」

「そう・・・別人格の俺が気失つた時助けてくれただろ？俺たちは二人ともおまえが心配なんだよ。」

嘘のない心からの本音頭で考えるよりも先に口に出たようだ。自分でもよく分からんがまあ良いか考えててもだるいだけだし。

少し話した後電話を切る。香奈恵も大丈夫そうだったし学校行くか。時計を見ると午後の五時を回っている。

つまり結果としてサボってしまったらしい。

うんしました皆勤賞を密かに狙っていた俺としては痛手だが考へるだけ無駄、過ぎたことは忘れてゲーセンでも行くか。

金糸町にあるmeat屋と言うゲーセンはいつも人が少ないため気楽に遊べるmeat屋に着くと富良たちが居た。

「いよう（。。。）ノ諸君元気か？」何となく聞いてみる。

「いよう（。。。）ノじやねーなりおまえ大丈夫なのかよ？昨日、新宿で龍四体ブツた斬つてきたんだろ？」「

何故か事情を把握しきっている坂牧が答える。

「何でそんな事知つてんだよ。」

「やっぱりニースでやつとつたよあれは貴吾の仕業だなと思つたら学校休んでたしな」

何？もう二コースに成つてゐるのか？馬鹿なマスクミミがこの世から無くなることを切に願つよ。

「まあ良いけど、富良あ授業どんな感じ？」

一日休んだんだから新しいところをやられてないと良いが・・・。

「現代史でおまえのとこやつてたよ人体鍊成のヤツとか」

何？もうそんな所なのか？

「学校当分休もうかな？どうせ質問責めに合つし。」

今までにも人体鍊成の話が出る度に俺が質問責めに合つ。ふざけんな俺を誰だと思ってやがんだ？全く邪魔でしうがない。初めの頃は良かつたが今は答えるのがだるい。

「ちゃんと学校に来なさい」

後ろにいた三島に言われた。

「普段サボつてるヤツに言われた無いわい」

返す。そんな事をしていたら

「あ～れ～翔凪じんか～」

と前から付き合いの合つた阪田祐樹がやつてきた。

さかだゆうき

「なんだよ文句があるんかい」「何となく聞いてみる。

「学校休んでゲーセンで遊んでるんかい?」「

「悪かつたな別にサボりたくてサボったわけ違うわ妙な関西弁になる。

昨日あつた事今日サボつた理由を話す。

「なんかいろいろ大変だな。そりゃ儲かるだろうからしかたないだろうけど」

そりやそりや何てつたって最年少で国家理分再術師に選ばれたあげく世界で初めて人体鍊成をやつてのけた天才扱いなんだから多忙でない訳がない。

「当たり前だ俺は国家理分再術師だぞ龍を斬る事もあれば人を斬る事もある。儲かるからしかたないだあ? 国家理分再術師舐めてんのか?」

ちょっとムカついた。

何も知らない青二才が俺の事を分かつた口利きやがつて俺の仕事はそんなに簡単じやない。

とまあちょっと怒つたがいいかだるいし。

本当は少し悲しかった。誰も唯の一人も本当の俺を理解してくれてはいなかつた理分再術は確かに便利な能力ではあるだがそれなりにリスクを背負つて生活している。

夢や希望もなく。

唯、淡淡と仕事をこなしている。

「何時だつて俺たちは悪者だつた死神だ悪魔だと言われ続け助けに来て追い返される。そんなんが良いのか? おまえは、何でキレてんだ俺は? まあいいやとにかく俺は眠い。

「帰る」

その場にいるのは気まずかたつたし眠かつた。帰つて寝ているとまた電話が鳴つた。

「はい? どちら様でしうか?」「ディスプレイを見れば分かるのだ

が。

敗したらしい」

電話の相手は草薙だつた

「馬鹿だな人体鍊成を失敗すれば不完全な人造人間がキメラになつちまうぞどうせ心理も見て無い好奇研究者どもがやつたんだろ?」

推察の通り

「つまり今日は倉成神の相手しに行かなきゃいけないんだぞ？」

「あれは幾らなんでも俺にサザニ倒せないぞ」

に似た物つまり「ヒト」になるはずだった物の残りかすが生き延びようと周りに在る物を飲み込んで成長する怪物なのだが。

文句を言つてみるが。

「大丈夫すでに東都と香奈恵君に依頼してある  
便で行くからな」 2日後の3415

死ねこのクソシジイ厄介事増やしあがんで

だから始末の悪い大人は嫌いなんだ。

「力でいたで弱ることはない

「おおい貴吾」

俺より先に蟻真大佐と鏑木Weckleが着ていたようだ香奈恵もいぬなんかとてつもない面子だ。なんと言おうが喚こうがこのチーム高校生しかいねーし。

まあいいか突っ込むのもだるい。それに俺と鏡でも辛い物がある  
アメリカ行つた事ねえな

・・・飛行機で19時間流石に疲れた。  
今日はハニーレンツで寝よう。

と思つた矢先に香奈恵さんがとんでもない事を言い出した。

「ねえ現場見に行こ」  
「う

馬鹿じやねえのもう疲れたから明日にしつけって  
結局見るだけ見ることになった。

辺りを爆音が包むやばいなこんなに早く出てくんnya  
鎧木と蟻真は戦闘慣れしてるから大丈夫だがこの嬢ちゃん  
何にも解つてない。その場に立ち竦んでいる。

「バカ！！伏せろ！！」手を引っ張つて体を引き寄せる。  
蟻真と鎧木はすぐに俺と同じ考え方を示してくれた。

とにかくここから逃げるそれが最優先事項だがどうやって逃げるか  
が問題だ。

WIN Gで飛んでいくのは相手にすぐ気付かれる。

「ステルスで行こ」  
蟻真が言った。

「そうしよう」

すぐにはステルスの構築式を立て発動させるだが一足遅かった。  
合成神に見つかった。

ヤバイやばいヤバイ yaba・i どうする。

「airblast」突然からとんでもない威力の攻撃系理分再  
術を展開する声が聞こえた。

仕方なく第三級理分再術風の防御円を発動して回避する。

それでも少し吹っ飛ばされた「airblast」は風の理分再術  
と呼ばれ風を起こす術としては最強それに対し俺の風の防御円はそ  
れをほぼ無効化するにも関わらずそれを吹っ飛ばして俺に干渉して  
きた。

「Are you OK?」と後から先ほどairblastを  
打ったと思われる金髪の女が聞いてくる。

「テメヒ ふざけてんのか殺す氣かそれとも助ける氣がないのか」は  
つきり言つてどつちも

一緒にと思うが香奈恵はありがとうとお礼を言つている。

まあ結果的に助けられ手分けだが日本語でお礼言つても解らないだ  
るまあいかと金髪の女が「あんた助けて貰つといてその態度何?」  
と日本語で悪態をついてきた。

何で日本語?しかも達者だし何か江戸つ子つぽいかも「あんた日本  
語出来たのか?」

何が何だか訳解らん。まあいか?

「て言うかあんた誰?」

「あたしはリサ・スティングレー今回あれを殺す事を国際理分再術  
協会に依頼された。そう言うアンタこそ誰?」

その名前を聞いた事があった。

リサ・スティングレーはアメリカで有名な理分再術師でまた風の鍊  
金術師とも言われるほどの風使いもある。

「これは失敬。俺は翔凪貴吾へえアンタが有名な風使いさんかい話  
はよく聞くよ。」

「アアアンタみたるのが世界最高の理分再術師、翔凪貴吾?嘘よ絶  
対嘘そんなこと言つたってバレバレよだいたいショウウナギは日本に  
居るはずだものこんな所にいるわけないわ!!」

なんて取り乱している。

「本当に俺は翔凪だココへはUNの依頼で来たがもう必要ないだろ  
う。」

「じゃあ本当にショウウナギなのね?キヤーキヤービツしまし  
ょう本物に会つちゃつたあああのう好きです付き合つて下さー。」

「何言つてんのアンタ」

後ろから香奈恵の声がした。

「さつきから黙つて聞いてたら何なの?いきなり貴吾はねア・タ・  
シ・ノなの」

「なんか話が見えないんですけど?」

『何でも良いが鏡変わってくれ』

「お前らしい加減にしとけ」

鏡が言うがお構いなし。

鏡が指を鳴らすと風が舞い上がった。

ちなみに鏡はもともと伝説クラスの剣だから魔法が使えたりす。しかし理分再術が発展した現代においてその魔法と同じだけのいや似ていることが出来る。

「airbrast」が良い例である。指を鳴らすと風が起こるのか科学的に風を起こすのかと違うだけである。

つまり神秘は神秘では無くなり魔法は魔術になつた。

先ほどの風で収集がついたようだ。

「生憎この体は一人の体じゃないんでね」

何でも良いがなんか妙な言い回しである。

「ええ、一人の体じゃない！？」

二人は息ピッタリに言う。そういう二人は知らなかつたんだつけ？まあ良いや。

と後ろで爆発音がした。

「な、何？」

またも二人は息ピッタリ。実は仲良いんじゃないだろうか？

しかし俺の想像は遙かに「airbrastだと」何て事だ。何か

量産型EVANGOLION？

白くて気持ち悪いのがairbrastを放ってきた。

鏡は左手を翳すだけでairbrastをかき消した。こいつ神か？強すぎる。airbrastはリサの

それよりより遙かに強い。

いくら何でも格が違いすぎる。俺のイメージ「強い」から「やばい」になるのは言つまでもないな。

さらに白EVAはロンギスの槍の様な槍を鍊成し投げてきた。しかも左手を翳すだけでかき消した。次の瞬間白EVAはバラバラになつていた。

干渉不可領域・・・それが鏡の能力の一つアヴァロンたるエクスカリバーの鞘の能力。

しかし無敵と言う訳じゃあるまいに。

暴れてくれたおかげで残っていた施設の残骸まで吹き飛んだ。調査もクソも無い。「帰るか」鏑木達に言ってその場を後にしようとするとリサがホテルまで来ると言い始めそれに香奈恵が反対したことでも問題が拡大していく。

「一人はほつといて帰るか?」鏑木達を引っ張つてその場から逃げ帰つた。

(香奈恵は後で拾つて帰つた。)

まあ明日にはまた日本で学校に行つているだろうし。

リサからはなんとか逃げきつた。

それにしても何だつたんだあの白い奴鏡が俺の思考に割り込んでくる。

「さあ知らん。ただ仲間で無い事は確かだ。」

そうコレは仲間にはなり得ないと、謎の残骸を手に考えていた。翌日学校に来ているわけだが何にも面白くない。

知つている事を言わても困る。それにこの分野は俺が開拓したんだし。馬鹿教諭が『ここ理解していますか?』なんて言つている。しかもこの俺に対して。

「あの~先生言つている意味が分からぬのですが?」

『だからここはだな・・・』

「そうではなくて俺に向かつて『理解していますか?』とは?何ですか?はつきり言つてあなたの説明の方が分かりにくいのですが?」

『教師に向かつて何ですかその口のききかたは?』

ムカつくなこいつ。

「ですからテメーみたいな三流理分再術師に教えていただくような事一切はないのですが?」

『な、何ですとでは教科書P154の水の合成をしてみなさい』

『やりましたが?』ノータイムで合成をやってのけた。

ついでに教師の宝具を分解してやつた。すると「airblast !！」と言ひ声と共にairblastが放たれてきた。

「先生、風の防御円発動した方が良いですよ」

少し忠告が遅かった。ってゆーか自分で気づけよつて感じ。馬鹿教諭は分解してある宝具で風の防御を発動しようとしたが呆気なく吹き飛んで行つた。

『それにして今のはリサ並みの威力だつたな』なんて鏡がいつてくる。

「リサア？ そんな事有るわけ無いつしょ」

「貴吾あ！」

潰された・・・何かに。

「何しに來たリサ・スティングレー」

「やあだあ『リサ』でいいわよ」

バシバシ

・・・たたくな

「何しに來たつて貴吾にい会いに來たつてゆーか結婚したいつていうかあ」

うるさいマジで

「ななな何だ君は」

弾き飛ばされた馬鹿教諭がリサに何か言つこる。

『リサに殺されんぞ』と鏡も言つてゐる、全くだ。案の定リサは怒つてゐる。

「あんた誰？ 誰に物言つてゐるか解つてゐるわけ？ だいたいわつき貴吾に何か文句付けてたでしょ？ あんたみたいなド三流が氣安く話して良い人じやないの。分かる？」

「ななな何ですと？ 三流？ 私が？ ほほうではコレでビツつです。」  
何故か腰からもう一個宝具を取り出した。

「It shines spear of death」

輝く死の槍。この三流見境無くなつたな。マジでうへぜへ。この業

は一流の攻性理分再術師でもミスると言つ超激爆ムズの術なのだ。  
そうそう白E○Aが投げてきたのもコレである。  
しかし意外なことに成功してリサに襲いかかる。  
仕方ない。

『鏡、頼むよ』

『任せろ』答えると鏡はairblastの発動詠唱を始めた。  
「It renders and breaks and the  
limitations of the god's of the  
wind power is carried out with  
the storm until the fate be  
comes that there is nothing .ai  
rblast」

死の槍は簡単に砕け散り教師は遙か彼方に吹き飛んでいった。さよ  
うなら一度と戻つてくるな。

「つてゆーか鏡お前いつの間にairblastが使えるようにな  
つたんだよ」

『この間リサが詠唱してるの聞いて覚えた』

う~ぜ~う~ぜ~マジで。てゆつか一回だけじやん詠唱したの。勘  
弁してくれよ俺使えないんだから。

「でもさでもさおかしくない?俺たち脳共有してんだから何で俺使  
えないわけ」

『さあ知らん』

まあ良いかそのうち使えるようになるだろ  
ふと時計をみると既に授業は終わっていた。ちなみにしづの学校は

チャイムが鳴らない。

ホームルームも終わつたんで今日はパンチングマシーンでもやりに  
いくか。

最近パンチングマシーンにハマつていて始めた頃は145kg 今  
は213kg一ヶ月ほどで68kg位あがつていて。  
どうしようもない友達からは「人外」「鬼」など妙なあだ名がつけ

られた。

むかちくのら・・・。

基、ムカつく。まあなんだか強い事は強いらしい。まあ最近やりすぎで肩や腕の筋肉がイカレ始めた。少し控えよう。うん。

すると目の前にえらくがたいの良いオヤツサンが立っていた。

「アンタが翔凪だな来てもりひ

「やだと言つたら?」

「力づくりだ」

「ヤナこつたクソ爺が」

ドカン

コンクリが割れた。バカ力が。

一発食らつたら終わりだな。

「喰らえ小僧」

しまつた後ろに・・・

気がつくと俺は

「倉庫?」

訳の分からん建物にいた。手足も縛られていない。

まあ良いや俺を誰だか知つてる以上理分再術封じがされているだろう。

一応試してみるか。

「その運命尽き果てるまで、風神の力の限りを尽くさん碎けその暴風を以つて a i r b r a s t」

さつき作つてみた日本語詠唱「 a i r b r a s t」まあね即興だから出なくとも良いんだけど壁はあつさりと崩れた。

あり?

なして?

まあ良いや脱出へと

前から白E○Aの大群が

『鏡、交代』

『・・・』

『鏡、ふざけてないで早く交代しin』

『・・・』

『鏡？？？　おい鏡ビーフした？返事しろーーー。』

「鏡はもう居ないよ」

前から声がした。

「あ？ テメHビーのぞいつだ？」

「知る必要はないよ君はこれから死ぬんだから」

「そうはいくかよーー！」

「人の世の情も無く、喜びも悲しみも意のままにして弄ぶ  
誇りたかく、健やかなる運命は、ついに我が物にあらず、われなら  
ず、望みわれならずなす術も無く汝がつらき仕打ちに身をさらすの  
み　望みを失い躊躇わす弦を鳴らし悲しみを歌え運命の強き一撃は  
力ある人すら打ち碎くが故に・・・ fate thousand  
arrow」

俺を誰だと思つてやがる。

理分再術師翔嵐貴吾だ！！

「ふざけんじやねえ俺は・・・俺は翔嵐貴吾だー」

白E〇Aの大群は一瞬で消し飛び後にはあの男が残つていた。

「で？ 誰が死ぬんだつて？」

「君だよ翔嵐貴吾。ほらきたよ」

「なつ」

後ろに何やら人影が「airblast」

「なんだと」リサだなんでそれだけではないさらに後ろには坂田、  
鏑木、蟻真、三島、青柳、仲里坂牧、坪口、富良、森谷や何かを含  
め学校の連中がいた。

「形勢逆転つて言つ訳じや無さそつだ」

「寧ろ君は追いつめられているんですよ。翔凪。」  
ちつ舐めた真似を。

「貴吾あ使つて」

キィイインコンクリートに剣が突き刺さる。

「香奈恵。ここから全力で逃げる。ここにいると操られちまつ  
うん分かつた貴吾必ず帰つて来る事  
分かつた」

さてまた面倒な状況だ。

一斉に襲いかかってくる。

「親玉を潰した方が勝ちだ。おいテメエ鏡は死んだのか」

「はい。君の代わりに」

「そいつはよかつた楽になつたな」

「・・・何をするつもりですか? 今後に及んで」

「テメエ俺を誰だと思ってやがる。世界で唯一人体鍊成をやつての  
けた男だ」

あいつの誤算俺は魂単体で蘇らせることが可能である」と  
「行くぞ鏡。孤高の戦士はここで安らかなる死を遂げ  
幾千の星の輝きと共に再び戦場を駆ける力を蓄え多くの聖人の力を  
借りここに復活せん・・・Revival Soul」

キィイイン

黄金の剣が共鳴する。

「殺氣だと翔凪とは比べ物にならん。」

「おいオッサン貴吾をよもやりやがったな死んで貰うぞ」

鏡の殺氣は膨大だったその辺り一帯が全て鏡の”セカイ”に成った  
かのように包み込んでいた。

「まだまだ私の人形は行けるよ  
「何ができるつて?」

the death which lives in the end of this world - - lend and give a sickle and self - - there fore, these self to which self does not render a limitation to destruction with you - - an infernal gate - - striking - - carrying out - - a fool - - death's cythe

怒りに満ち満ちた鏡の術が男の皮膚、筋肉、骨、脳、臓器。を全て分解していく。

death scythe

死神の力行使できる唯一の神秘正に魔法なのである。

コレを使われた者はどんなに致命傷でもどんなに痛くても氣絶することを許されず最後の肉片が消え去るまで死ぬこともさえできない。

「帰ろう香奈恵が待つてる。」

鏡は言つて貴吾と入れ替わつた

「あ～あ、やりて～」なんて事を考えつつ帰路についた。

咎人の翼序章 完

## 一人の俺（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3399c/>

---

咎人の翼～序章～

2010年12月21日02時43分発行